「生きる力を育成する教育の創造」

—アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた「深い理解」をめざす授業の追求—

Ⅰ　主題設定の理由

世界は今，大きな変動期にある。グローバル化や情報化，そして人工知能を初めとする先端技術の導入により，社会の仕組みそのものが大きく変わりつつあることを実感しながら生活している。未来を予測することも困難な状況の中，教育も歴史的な転換期を迎えている。それゆえに，主体的に学ぶこと，深く学ぶこと，他者と対話しながら学んでいくことが重要である。

これまで本校では「キャリア教育実践プロジェクト」や甲州市「確かな学力」育成プロジェクトと関連づけながら研究を進めてきた。また，昨年度より，「学力向上アクティブ・ラーニング推進事業実践検証校」の指定を受け「わかる授業の工夫」や「家庭学習の充実」を柱に，生徒の学力向上を図る研究を行ってきた。「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけ，今までの研究の成果を生かしつつ，先に挙げた資質能力を育てるためには，「何を知っているか」という知識の獲得から，知識を使って「どう問題を解決ができるか」を考える学習への転換が求められている。そのためには，知識を自分のものとして「深く理解」する必要がある。「深い理解」のためには授業において，「深く考える」場面を学習プロセスの中に設定すること，そして，そういう習慣化によって定着されるものと考える。

本校の生徒は，真面目で素直である。しかし，学習に対する主体性や自己肯定感が十分に育っているとはいえない。これからの時代を生き抜くために，知識を深く理解し，その知識を活用しながら自信を持って「身近な地域や社会，そして世界との関わり」の中でより良い人生を築いていく力を身につけることを願って本主題を設定した。

Ⅱ　研究の具体的な内容と方法

1　アクティブ・ラーニングの実践を支える具体的な研究（拡大校内研究会の実施）

（1）アクティブ・ラーニングの研究授業と研究協議・学習会（年７回）【全体会】

（2）アクティブ・ラーニングの授業づくり・授業改善の向上【教科ブロック研究会】

2　アクティブ・ラーニングの実践の基盤を支える具体的な研究

（1）学級・集団づくりの質の向上【学年ブロック研究会】

ア　hyper-QU 調査の実施と結果分析・情報交換，SGE や SST の活用

（2）家庭学習と授業との連携と充実【学年ブロック研究会】

ア　松中ノート（本校独自の家庭学習ノート）の充実や甲州市「家庭学習の手引き」の効果的な活用

（3）学びの集会の実施（年２回）【全体会】

（4）授業規律の環境整備【全体会】

（5）全国学力・学習状況調査及び県学力把握調査の分析と考察【教科ブロック研究会】

ア　事前・事後アンケートによる生徒の学習に対する変容の分析と考察

Ⅲ　成果と課題

1　成果

本年度は，本校の研究実践を様々な機会で甲州市内外に発信できた。一人一実践を研究授業と位置づけて拡大校内研究会を年6回実施し，述べ300名以上の来校者に本校の授業を見て頂くことができた。また，甲州市「確かな学力」育成プロジェクトの「授業づくり・授業改善部会」との連携において，東京大学大学院の市川伸一先生を招聘しての「教えて考えさせる授業」の理論を取り入れた授業を公開できたこと，ブロック交流研究会の中で小中連携の視点で授業を行いたくさんの指導や助言を頂くことができた。また，研究授業を行うことで全教職員が「主体的・対話的な深い学び」の視点を意識し，日常の授業の中でも実践できたことは大きな成果である。

「学校評価アンケート」の中で「先生はわかりやすい授業をしてくれている」項目については，生徒99%・保護者92 %とともに経年4年を見ても高い数値であり，「集中して授業に取り組んでいる」の項目も生徒97%・保護者91%，「学校からの課題等にしっかり取り組み，毎日の家庭学習に頑張っている」生徒98%・保護者86%と高い数値となったこともその表れである。6月と12月に行った「生徒の事前・事後アンケート」から授業規律に関わる項目は，すべて90%以上の肯定的な回答となっていた。「授業のはじまりと終わりのあいさつ」「返事をする」の項目については100%であり，どの学級でも学習環境や授業規律が整っていた。

松中ノートの取組は4年目を迎えた中で確実に定着をしている。どの学級も提出率はほぼ95～100%となっている。また，図表やイラスト，新聞記事を読んだ感想，自分で興味関心を持ったことを調べるなど授業のまとめだけでなく，創意工夫を凝らしたノートもあり，学習に対する意欲や自主性が見られてきた。アクティブ・ラーニング実践の研究を受け，本校がめざす「深い理解」の授業実践を生徒や教職員がともに追求していることが大きな成果であった。

2　課題

学力の定着については，発展段階であるが基礎基本の定着を図りながら，さらに思考力・判断力・表現力を身につけさせる授業実践は必要である。授業評価については，今後は「なぜ『オール5』をめざすのか」「なぜ『授業』を大切にするのか」など生徒に根本的な理由や意識づけを考えせることが課題である。松中ノートの定着率は高いものの，本来の目的である「伝える力」「表現する力」については発展途上である。今後も授業と家庭学習との連携を模索する中で，松中ノートの効果的な活用を図っていきたい。主体的に問題を解決していく力を育むため，今後もさらに研究を深めていきたい。

Ⅳ　成果物

1　一人一実践（各教科の学習指導案，ワークシート）
2　「学びの集会」の実施と生徒のワークシートおよび授業評価シート
3　松中ノート（家庭学習ノート）
4　事前・事後アンケート

（研究主任　武藤英紀）